



田植え

んは少ないし、境内も建物も荒れていました。なんとかしなくてはと整備に取り掛かり、当時預かっていたオーストラリアのクリス君にこの辺り一帯を覆っていた竹藪を切ってもらい始めたのが、実は上総自然学校の始まりです」。そしてその活動は、樹木葬を始めようと、大学の研究者や学生に真光寺一帯を植生調査してもらった事で大きな転換点を迎える。



草取り



収穫



真光寺住職  
岡本和幸師

「真光寺の奥にある谷津田は、かつて豊かな里山であり、オオタカが住むなど、貴重な生態系が残っていることがわかったんです」。そこで、半ば勢いで水田を一枚借り、開墾し始める。当時、青少年教職員を務めていた師は、この豊かな自然を利用して、青少年を対象とした活動を何かできないかと考え、市原、富津の寺院と共同で、「上総自然学校」をスタートする。しかし、檀務の合間にその活動を手掛けるのは困難を極めたため、スタッフを「1名」雇用し、少しずつ活動の幅を広げていった。

「もちろん、スタッフを雇用するためには、収入が必要で。自然学校参加者からは一人2千円の参加費を集め、その人件費に充てています。人を集めるためには参加費を低く設定しなければなりませんので、収入は厳しいのが実情です。しかし寺院が出費をしてもやりたいと思えるから何とかやっています」。また、「お寺がやることだったら」という安心感が、多くの人を引き付ける要因ともなっているという。

では、地域の人々との関係はどうなのであろうか。その点を探ると、師の表情は険しくなった。

「当初は、外から人が入ってくることに反対の人も

少なくなかった。ですが、観光バスで自然学校の参加者が詰めかけてはじめて、自然という宝が地元にあることをわかってもらえ、少しずつ自分たちが暮らす地域が綺麗になってよかったです、感謝してもらえようになってきました」。また、農業を通して、地域の中での仲間も増えて来ているという。

「活動の善悪を訴えずに、地道に人の輪を広げながら実績を積み重ねていくのが大事なかなと思っています」と、表情を引き締める。

多くの自然保護団体がNPO法人格を取得しつつある今、「上総自然学校」はNPO法人格を取得していない。その理由を尋ねると、「法人格とは人格のよくなるもので、お寺はすでに宗教法人という人格を持っています。新たに法人格を取る必要を感じていません。上総自然学校は、任意団体という扱いで補助金や助成金もいただいています。そして自然学校は私にとつての宗教活動なのです。仏教の基本理念からすれば、山川草木、すべての生きとし生けるものは平等。道元禅師は、山の景色、谷の響き、それは我が釈迦牟尼の声と姿だ」とも仰っています。要するに、自然が縁起して完成している姿そのものが釈迦様の教えなのだという捉え方をなさったのです